



2006年



『文藝春秋』2004年4月

◇総理府科学技術会議生命倫理委員会→
内閣府総合科学技術会議生命倫理専門調査会
(1997年~2004年)

◎主要な論点

- (1) 人の生命の手段化・資源化の懸念はないのか？
- (2) 科学研究上の必然性(他の可能性はどうか・クローリン胚利用の可能性)はあるのか？
- (3) 卵子の調達による女性の生命の侵害の可能性はないのか？

(1)人の生命の手段化・資源化の懸念はないのか？

◇万能細胞の由来の問題←→利用の帰結の問題

欧米:キリスト教の死生觀　日本:仏教・儒教・神道
個の重視・理性の重視　　つながりの重視

◇利用の帰結の問題とは？

◎万能細胞を利用することによって、人類の生活
にどのような変化が生じるのか？

☆ポジティブな帰結——研究者やスポンサーが
主張する有用性

☆ネガティブな帰結

☆予想できない領域

☆ネガティブな帰結

- ①実験室内でヒトのいのちの大事な部分を育てる、改変する、利用するということ。
- ②人間の性質をもつが人間でない存在。キメラ・ハイブリッドなど。それらを自由に操作すること。ある種の暴力の容認。人間の種の同一性を脅かす可能性。
- ③人間を作ることに近づく。そのこと自体がいのち重みを失わせる。
- ④人間改造(エンハンスメント)の推進による人類社会の変化。

☆予想できない領域

【2. 万能細胞からの生殖細胞作成の是非】

(1) 生殖細胞を作成し、そこから受精卵を作成すること

◎人間の作成——禁止すべき。

- ☆人間を作成することは、人のいのちを軽くする。
- ☆そのことによって、人のいのちの尊厳を貶める。
- ☆しかも、それを道具や資源として利用することを念頭に置いている。人間の道具化・資源化。

特定胚及びヒトES細胞等研究専門委員会の討議から(小倉淳教授)

その他の事項

胚の作成を伴わずに配偶子の成熟の確認はできるか。

生物学的見地からは、胚の発生を見ないと、配偶子の成熟の確認はできません。
さまざまな配偶子の細胞生化学的解析は、その成熟に関する一部の指標を見ている
に過ぎません(もちろん、その解析に意義がないわけではありません)。

ヒトで生殖細胞の体外発生過程を研究する意義はあるか。

- 2段階に考える必要があると思います。
- 1) ヒト材料であることに意義があるのか
おそらく生物学の基礎研究としては動物の研究で十分
しかし、生殖医療技術の開発・改良のための情報を得るという意義はある
(必須ではない)
 - 2) ES(iPS)細胞由來の生殖細胞を使うことに意義があるか
in vivo由來で大量の始原生殖細胞を採取することは困難
よって、ES(iPS)細胞から効率的に始原生殖細胞を作成できるようになると、
配偶子の発生研究が進む可能性はある

(2) 生殖細胞の作成

(A) 生殖細胞作成の当面の目的

(B) 作成によって可能になること

(A) 生殖細胞作成の当面の目的

◎卵子の作成→卵子を利用してクローン胚を作り、

そこからES細胞を作る。そして難病を治療する。

◎それだけでしょうか？

◎すでに予定されている研究目的があればあ

げるべき。

(B) 作成によって可能になること

◎すでにマウス等の実験動物で行われていること
は何か？

◎将来、予想される利用法にはどのようなものがあ
るか？

◎どのような利用法が懸念されるのか？

☆キメラ、ハイブリッド

☆人間の重要な身体部位が、人間の身体外に
生きて存在すること。

☆これらは、人間が道具・資源となること。

【3. 国際協議の必要性】

- ・生命科学における競争環境の見直しの必要性

◇なぜ、それほど急がなくてはいけないのか？

◇倫理的配慮と科学的前進競争はどうすれば両立できるのか？

◇倫理的配慮を優先するためには、どのような態勢が必要か？

朝日新聞

2007年12月31日